

学校における文化と不平等：ブラジル人少女マルシアの事例から

山ノ内，裕子

日本学術振興会特別研究員：九州大学大学院人間環境学府：教育人類学

<https://doi.org/10.15017/1006>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 5, pp.207-221, 2003-03-30. Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

学校における文化と不平等⁽¹⁾

— ブラジル人少女マルシアの事例から —

山ノ内 裕 子

1. はじめに

1990年に出入国管理法が改正され, 日系南米人の合法的就労を可能になったことにともない, 日本の教育現場には南米出身の子どもたちが多く学ぶことになった。来日直後の教育課題は, 「日本語教育」と「適応指導」〔志水 2001: 12〕がその主たる課題とされていたが, 「長期化する国内の不況も相まって, 現在では一時期のような爆発的なブラジル人入国ラッシュは沈静化し, 最近では受け入れ初期の日本語教育の問題よりも, むしろ滞日歴の長い子どもの母語教育の問題や学力保障の問題, そして生活指導に関する問題や卒業後の進路の問題に中心が移ったと言える」〔山ノ内 1999: 89〕。とくに, ブラジル人生徒の不登校は学校現場や教育学者によってしばしば問題視されており, 在日ブラジル人コミュニティやブラジルの日系社会においてもしばしば社会問題としてメディアで報じられている。

筆者は1995年以来中国地方のA市にて参与観察を行ってきたが, A市においても現場の教師たちによって同様の問題が指摘されている。同和教育のさかんなA市の場合, 教育行政よりもむしろ教職員組合が主体となって教育現場から差別をなくすとりくみを行ってきた。ブラジル国籍をはじめとするニューカマーの子どもたちの教育も, 同和教育や在日朝鮮人教育の系譜に位置づけられるのである。よってA市では, 教師たちによる「高校『全入』運動」が奏効して公立高校の入学は比較的容易であるため, 日本語の読み書きが多少不自由であっても, 義務教育終了後は, 本人が希望さえすれば職業高校や定時制高校への入学も可能となっている。

にもかかわらず, A市在住のブラジル人ティーンエイジャーの多くは, 学業に対してあまり関心を示さない。彼/彼女らは日本で生活が長く, 生活レベルの日本語に関してはほとんど問題がないにもかかわらず, 小学校を卒業して同じ校区内の中学校に入学する頃から次第に勉学に対する意欲を失い, 代わりにファッションや恋愛, 労働などへの関心を強めていくのである。彼/彼女らの中には, 就労可能な15歳の誕生日を迎えて, 中学校卒業を待たずに早々と就職を決めた者や, 中学在学中に飲酒や喫煙, 性交渉を体験した者なども見受けられるし, 年齢を偽って15歳以前から働く者も決して珍しくはない。

A市在住のブラジル人の子ども達に限らず, 日本で生活するブラジル人の子どもたちは, 日本のみならず, ブラジルにおいても, 研究者やジャーナリストによって, 「セミリンガル」「学校不適応」

などの言葉で表象される傾向にある。彼／彼女らは、「落ちこぼれ」のレッテルを貼られ、社会の仕組みからはじき出される不幸な運命をただ諦めて受け入れるだけの、受動的な存在として扱われる傾向にある。そして、そのような「ポルトガル語も日本語も中途半端で、かわいそうな子どもたち」が勉学を辞めて働いたり、非行に走ったりする姿は、興味本位に、そしてややもすれば感傷的に語られるのである。

彼／彼女らの行為の背景にある文脈を無視して、「落ちこぼれ」の烙印を押すのは簡単である。しかし、なぜ日系ブラジル人の子どもたちが、そのような「逸脱行為」をするのか、そして彼／彼女ら自身が自らの行為をどう解釈しているのかという点についての研究は、管見の限りでは皆無である。そこで筆者は3年前、A市で行なったフィールドワークをもとに、当時中学生～高校生の年齢の彼／彼女らが、なぜ、日本の学校を拒絶し、働くことを選ぶのかについて、P・ウィリス〔1996〕の社会的再生産理論やM・アップル〔1992〕の抵抗理論をもとに民族誌的考察を行なった〔山ノ内 1999〕。つまり、子どもたちを「親の都合で日本に連れてこられた無力な存在」として、「文化の狭間」や「差別の構造」のなかに押し込めてしまうのではなく、日常生活実践によってさまざまな「戦術」〔セルター 1987〕を編み出しながら、主体的に自らの行き方を選択する存在として捉えるという視点である。

そこで本論文では、当時行なった調査のインフォーマントの一人で、A市に6年間住んだのち、2001年、ブラジルに帰国した日系三世の少女マルシア⁽²⁾を事例として、日系人ティーンエイジャーの日本での経験を描くこととし、そこから在日外国籍児童生徒教育について若干の考察を試みることにする。

2. 研究の方法およびインフォーマントについて

インフォーマントであるマルシアは、日系ブラジル二世の母とイタリア系ブラジル人の父親との間に生まれた、日系三世の女子（1984年12月生まれ）である。滞日期間は、1995年～2001年までの6年間である。1995年春、10歳の時に来日し、A市内のB小学校で小学校5年生に編入。ブラジル人児童のために設けられた日本語学級で1日1～2時間、日本語の取り出し授業を受ける。筆者が彼女と知り合ったのは、6年生に進学した翌春、筆者が修士論文執筆のために日本語指導助手としてB小学校で参与観察を開始したときにさかのぼる。

当時、筆者は教育実習生という身分で同小学校におけるフィールドワークが許可され、1995年6月～10月までの間、日本語学級を中心とした参与観察の実施が実現した。そして、博士課程進学後も引き続きA市において断続的にフィールドワークを実施し、マルシアをはじめとする同市在住のブラジル人ティーンエイジャーの若者文化について調査を行なった。マルシアに対する聞き取りは、その調査成果の一部である。

A市B地区において調査を行なう一方で、筆者は1998年から、ブラジル・サンパウロ州において、長期の現地調査を開始した。ブラジルでは、これまで国内でインタビューないし参与観察を行なっ

てきた子どものうち、帰国した者を追跡調査したほか、子ども達の親の世代にも焦点を当てて、さまざまな世代・性別・社会階層の「日系ブラジル人」に対してインタビューを行った。また、ブラジルには、日系人によって結成された様々な日系団体が存在するが、そうした団体においても参与観察を行い、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ形成過程を構造的に、さまざまな角度からとらえることを試みた。

ブラジル現地調査では、マルシアの留守家族に対しても調査を行なった。筆者は4年前に実施した最初のブラジル現地調査の際、彼女の双子の妹（当時10歳）をブラジルの叔母宅まで送り、その後、しばらく彼女たちの家にホームステイしていた関係で、彼女や彼女の妹たち、そして両親やブラジルのおじ・おばなどと家族ぐるみの付き合いが続いている。また筆者は2年前、日本に一時帰国した際、A市にて約2ヶ月間（2000年3月～5月）フィールドワークを行ったが、その間、筆者は彼女の両親の厚意により、彼女と彼女の両親が暮らすアパートに下宿していた。そして、彼女が帰国した後は、彼女の家を訪問して聞き取りを行なった。

このような状況のなか、筆者は長期にわたってインタビューが可能となった。しかし、彼女がテープやノートを目の前にした形式的なインタビューを嫌ったため、以下の語りのほとんどは、彼女の了解のもとインフォーマルな状況において行われたものである。本論文では、これまで集めたフィールドノートのなかから、特徴的な発言を拾ったものを中心に分析を行う。

3. 日本の学校におけるマルシアの経験と語り

1) つらかった小学校時代（聞き取り時期：1996年／小6／滞日2年目）

「クラスでは授業中助けてくれる友達はおるけど、本当の友達はおらん。日本人は冷たい。
早くブラジルに帰りたい」

筆者が日本語学級で参与観察を開始し、初めて彼女と会ったとき、彼女は来日2年目で、やっと生活言語としての日本語が話せるようになったところだった。学校内における筆者の立場が正式な「先生」ではない「教育実習生」であり、筆者はB小学校において、彼女よりも「新参者」であったことと、加えて、学校の中で最も周縁的な場所である日本語学級⁽³⁾に位置づいていたことから筆者に対して関心を持ったらしく、休み時間には筆者のいる日本語学級をしばしば訪れるようになった。筆者がB小学校で調査を開始する前から、彼女は日本語学級クラスでは浮き気味であり、休み時間にはたびたび、日本人生徒が入ってくることもない日本語学級に遊びにきていたという。なぜなら、日本語がうまく話せないためクラスメートとうまく意思疎通ができず、親しい友人もいなかったからである。皆が「同じ」であることを求める日本では、既に小学校の段階から、同質性の高い者同士で固まり、「われわれ」ではない、異質な「他者」を排除する傾向にある。

B小学校はもともと同和教育が盛んであり、担任も同和教育の実践の経験から、「差別」のない

学級集団作りを目指そうとした。日本人クラスメートは、担任から言われたとおり、ブラジルからやってきた同級生マルシアを表面上は彼女を受け入れようとしていたが、言葉の壁を超えてまで彼女と友達になろうとはしなかった。

マルシアは、「日本人のみんなと同じようになれば、日本人と友達になれる」と考え、日本人クラスメートと同じように振る舞い、同じような格好をして、日本人の輪の中に入っていこうとした。しかし、彼女が「同じ」を意図したつもりでも、日本人クラスメートにとってマルシアの存在は異質であり、彼女の試みはうまくいかなかった。その結果、彼女は必要以上に他人と接触することを避けて、自分の殻に閉じこもるという道を選んでしまった。日本語学級の担任や学級担任、そして同和教育担当の教師たちは、彼女が日本人クラスメートとの間に真の友情を育めるように、さまざま取り組みを行った。しかし功を奏さず、マルシアは原学級よりも日本語学級のほうに居場所を求めている。

2) 中学校に入って (聞き取り時期：1998年7月・10月／中2／滞日3年目)

1997年、同じ校区内のB中学校に進学すると、日本語も次第に流暢になり友達も増えた。中2になって久しぶりに筆者と再会した彼女は、つらかった小学校生活と比較して中学校生活がいかに楽しいか、筆者に語ってくれた。

「中学校は楽しい。でも小学校のときは色々あったんよ。まじで、転校生より最悪じゃった。日本語分からなかったし、友達なんて一人もおらんかった。」

しかし、彼女はしばらく会わないうちに、他人に対して随分強気な振る舞いをするようになっていた。友人に対してだけでなく、教師や両親などに対して反抗的な態度を取り、外見も明らかに派手になっていた。髪の毛は金髪に近い色に脱色しており、制服のスカートはひざよりずっと上まで短くしており、ブラウスは指定外のものをすそを出して着ている。これは日本で初めてできた「親友」、さちこの影響であった。さちこは小学校のときからクラスメートだったが、工業高校で学ぶ高校生の姉がいるせいか、他の生徒より情報通であり早熟であった。そのため、マルシアも中学入学後から、さちことともに大勢の「普通の生徒」と同調するよりも、むしろ、教師に反抗したり校則を破ったりするような、一部の異質的で逸脱的な日本人生徒のグループに同調する方を好むようになったのである。なぜなら、さちこ達はマルシアをはじめ「仲間」とみなしてくれたばかりか、いつも彼女に本音でぶつかってきたからである。また、こうしたグループに属しておれば、小学校のときさんざん「ブラジル人」だからという理由で自分を見下し、仲間はずれにしていた他の日本人生徒に対して、威圧感を与えることができるからである。こうして、彼女は見かけの派手さと強気な態度で、周りの日本人クラスメートを威圧してきた。

「今日、だるかったけ、しばらく黙っとったら、『ねえ、マルシアどうしたん？怒っとるん？うちさあ、なんか悪いことした？』って友達が心配してきた。みんな、あたしの機嫌ととるんよ。」

「最近友達から『冷たい』って言われる。優しくしたら、友達からなめられるけど、冷たくしとった方が、みんながうちのことを怖がるし、なめられなくなる」

「こないだ、まゆ毛、細くしたんよ。こんな風じゃけ、うちは下級生たちから恐い先輩って思われとる。ケータイ（携帯電話）を持っているのは多分2年生でうちだけ。さちこも持つとるけど、ケータイじゃなくて、PHSだし。3年生にはケータイ持つとる人、2、3人おるけど。」

ちなみに、携帯電話は日本語の話せない父をうまく乗せて、買ったものである。今でこそ中学生の携帯電話の所有は珍しくないが、当時（1998年）は中学生の間ではまだ珍しかった。彼女は携帯を学校に持っていき、自慢する。そして、同じクラスで女子から人気がある男子学生や、街で「ナンパ」されて知り合った年上の男性の電話番号が入力された携帯端末を、自慢げに筆者に見せてくれた。

また、筆者がマルシアと一緒に歩いているとき、制服のスカートを短く改造し、髪を明るい色に染めた上級生が向こうから歩いてきたことがあった。彼女は「せんぱーい！」と甘えた声で「先輩」に駆け寄り挨拶し、二、三言葉を交わしたあと、以下のように語った。つまり彼女は、日本の女子中学生のように先輩・後輩という縦関係を受け入れているということ、そして日本的な学校のタテ社会の構造の中でも、自分は特権的な立場にあることを筆者に示したのである。

「あれはテニス部の先輩。テニス部の先輩たちって、うちの中学でいちばん目立っとるけど、うちは先輩達からも結構かわいがられとる。」

マルシアは日本の学校生活に慣れると、日本人と同じように過ごしたいと思うようになった。B中学校では、「ブラジル人としてのアイデンティティを尊重する」ということが外国籍生徒に対する取り組みの柱のひとつであったが、彼女は「ブラジル人として特別扱いされること」よりも、むしろ「日本人と同じ」ように扱われることを望んだのである。

彼女は父親が非日系であり、母親も特に日系人であるということに重きを置かないため、出生時、日本名のミドルネームを付けられることはなかった。しかし彼女は友人と一緒に考えた「冬子（とうこ）」という名前を気に入り、それをもう一つの名前として使うようになった。ノートや持ち物に「増田冬子」と記してみたり、警察に補導されそうになったときも、学校名や年齢を偽ったほか、

「増田冬子」という名前を使ってブラジル人としてではなく「日本人として」振る舞った。学校では「マスダ・マルシア」というカタカナ表記か「増田マルシア」が使用されていたのであるが、彼女は名前によって、他者から「異質な存在」と見なされることを拒んだのである。

また、さちこやさちこの姉、みゆきからは「マルシア」の一部に「子」をつけて「まる子」と呼ばれていた。「まる子は日本人と全く同じだね」と言われ、彼女もそれにうれしそうにならずく。さらに、みゆきとの付き合いを通して高校について情報を得ると、自分も同じ高校に進学したいと思うようになった。また、市内の定時制高校にはブラジル人生徒が進学を果たしている。その様な話を聞くうえで、自分と同じくらいの成績のさちこ（彼女の語りでは「1と2ばかり」）やブラジル人の先輩が進学できたのだから、自分も進学したいと思うようになった。

「中学を卒業したら、日本の高校に行きたい。P高校にはブラジル人の先輩がいるんだって。どの人か分からんけど先生がそう言いつた。まだお父さんお母さんには話してない。だって、もうすぐ帰国するって言うのとるけえ。高校は工業高校がいい。さちこのお姉ちゃんを通つとるけど、男子が多くてノリが良くて、ぶち楽しいって。校則も全然厳しくないって。商業高校は女子が多くていや。」

しかし、マルシアには学力的にもまた家庭の事情においても高校進学は不可能だということが分かっていた。いくら日本語が話せるようになったといっても、抽象的な思考に必要な学習言語はなかなか獲得できないし、一方で彼女の両親は帰国をほのめかしていたからである。結局、彼女は進学を断念した。クラスで高校に行かない（行けない）のは彼女一人であった。

彼女の苛立ちと強気な態度。彼女は「なめられないようにするため」と語るが、彼女はなぜ「なめられる」と思ったのであろうか。筆者はその理由の一つとして、自分と日本人クラスメートとの間に見えない境界線が存在することに気がついたからだと考える。なぜなら、日本人クラスメートと同じように日本語を話し、テレビや芸能、そして好きな男子生徒について話題を共有できるようになっても、「高校へ行けない」という事実は、「みんな」との間に明確な境界が存在することを否応なしに自覚させるからである。再び出来た友達との間の溝。そこで、マルシアは他者に対して強気な態度を取るようになったのではなかろうか。なぜなら、他人より彫りの深い「ハーフ」顔の彼女が派手な格好をして強気の発言をすれば、被差別者としての憐憫のまなざしを跳ね返すことができるからだ。

一方、彼女はこれまで距離を置いていたブラジル人たちと積極的に付き合うようになった。マルシアより後にブラジルから転入してきた他のブラジル人生徒たちは、校内でもポルトガル語で話してブラジル人同士で固まっていた。しかし彼女は中学校に入学してからは、そうしたブラジル人グループとは距離を置いて、さちこを中心とした日本人ばかりと遊んでいた。だが、周りが受験を意識し始めて、進学をあきらめた時点で、彼女は既に働いている年長のブラジル人や、同じアパートの隣人で、ブラジル人やブラジル文化に対して興味を持つ20歳代前半の日本人の青年たち⁽⁴⁾と付

き合い始める。お酒、タバコ、ボーイフレンド、化粧、深夜の外出。全て、日本人クラスメートには体験できない世界であった。そしてブラジル人と交際するうちに日本人とブラジル人の違いを改めて感じるようになる。彼女は学校の外の世界について、次のように語る。

「ちょっと前までは日本人の友達と遊ぶ方が多かったけど、最近はブラジル人と遊ぶ方が多くなった。3週間くらい前にはじめてK市（車で1時間くらいのところにある工業都市）のブラジル人が経営しとるディスコに行ったのがきっかけ。お客さんはみんなブラジル人で、ブラジルの音楽がたくさんかかる。でなあ、そのディスコで彼氏が出来たんよ。彼氏は優しいし、髪の毛は金髪に染めとって、かっこいいんよ。日本に来てから一年くらいじゃけど、日本語はよう話せん。

あと、ディスコでは、うちみたいに長く日本に住んどって、結構遊んどる女の子と仲良くなった。彼女はダニエラっていうんじゃけど、年もうちと同じ。中学校は一応行っとるみたいだけど、なんかもう、完全に好き放題にしとるし、日本語も日本に4年住んでるからペラペラ。結構、うちと似とるじゃろ？

ディスコには、日本人の友達連れて行かない。日本人はみんな一緒に固まるから面倒。ブラジル人と遊ぶときの方が楽しいかな。ディスコで、ダニエラに勧められてテキーラ飲んだ。ちょっと酔っ払って楽しかった。でもお酒は初めてじゃないよ。前に日本人の友達と飲んだことあるけえ。ここのディスコは未成年でもお酒出しよる。でもね、うち、いつも年上に見られるじゃろ。じゃけえ、ディスコでも他のお客さんたちに『えー、ほんとに14歳？ 18歳に見えるよ』って言われた。他のブラジル人の女の子の方が、もっと幼く見えるかもしれん。」

高圧的な態度と同様、積極的な消費行動や夜遊びは、日本人クラスメートを圧倒させるのに十分であった。両親は日本の学校生活や日本人の生活行動様式を知らぬため、彼女の言いなりである。彼女は他の日本人クラスメートより多く小遣いをもらい、深夜の外出も親から許されていた。もし、他の日本人生徒が、同様のファッションで登校したり、深夜外出して飲酒したり、無断遅刻や無断欠席を繰り返したりしたら、たちまち教師から叱られてしまうだろう。マルシアは、「外国籍だから…」という理由で、中学生としての規範に従わないことが黙認されていたのであり⁽⁵⁾、また彼女もそのような特権を利用していたのである。つまり彼女は、日本の学校によって本質主義的に付与された負の差異を逆手にとり、対抗文化によって正の差異に転換しようとしたのである。

こうして、マルシアは「勉強についていけない、高校に行けないかわいそうなマルシア」という他者のまなざしに抵抗するための戦術として、「派手で怖い、大人っぽいマルシア」という自己イメージを演出することを選び、その結果、ポジションから脱したのである。つまり、大人が作った学校社会の価値基準ではなく、日本人クラスメートも一目置くような対抗文化の創出によって、他者によって付与された負のラベルを剥がそうとしたのである。

しかし、日常の中、彼女は強いストレスを感じていたらしく、筆者にこう語ったこともあった。

「こないだ、風邪で病院に行ったら、先生から、「胃が弱つとるね。あんまり深く考えすぎたらいけんよ」って言われた。ブラジル人と遊んどっても日本人と遊んどっても、色々考えることがあるけえ、ときどき胃が痛うなる。」

ブラジル人たちとの付き合いをはじめてからは、マルシアは再び日本人クラスメートとの間に距離をおき、中学校3年の二学期には一旦学校を辞めて、近所のゴム工場で働きはじめた。しかし「気分が乗らないので」長くは続かなかった。中学校へは結局、行ったり行かなかったりだったが、学校側の配慮でなんとか卒業式を迎えることができた。

3) 卒業そして就職（聞き取り時期：2000年3月／中3卒業直後／滞日5年目）

中学卒業後の進路として就職することを選んだ彼女は、卒業式の直後、中学生生活を振り返って次のように語った。

「卒業式では少し泣いてしまった。式の前に職員室で（髪の色を一時的に変える黒色のヘアカラー）スプレーを借りて髪の毛を黒に直した。みんなもちゃんとしとるんじゃけえ、うちだけ茶髪にしとったら変じゃけえ。卒業したら、もうわがままを言うて甘えることがなくなると思うたら、寂しい。でも学校にはもう戻れんじやろ…。」

「受験関係ないけえ、もう（学校に）行く意味ないじやろ。じゃけえ、3学期から学校に行かんようになった。期末テストも受けとらんし、たくさん休んだけえ、まさか卒業できるとは思わなかった。先生は学校に来て欲しかったみたいじゃけど。やっぱ、（勉強と）働くのとは違う。」

「くやしかったのは、中3のとき、エレナ⁽⁶⁾がよその中学から転校してきてから、授業中、黒板にふり仮名がなくなったこと。『エレナだって漢字読めるんじゃけ、マルシアだって読めるじやろ』だって。そんなの、読めるはずない。エレナは小2から日本におるけえ、うちより漢字もたくさん知つとる。でもうちは5年生で日本に来た。5年生で来て、いっぺんに1年から5年までの漢字覚えられるわけないよ。」

また対人関係についても以下のように語った。

「昔はなめられてとった。なめられても黙るか笑うしかなかったけど、中学に入ってからやられたらやり返すようになった。友達とけんかしても負けとったけど、3年生くらいから負けなくなった。」

「日本人の子達を幼いって思うときもあった。けど、やっぱ、そんなこと、面と向かっては言えん。じゃけえ、『えーっ、うそおー』とか、みんなに合わせて自分の方を下げとった。」

こうして彼女は2000年3月、中学校を卒業した。卒業式が終わって数日後、周りの友達が春休みで遊びまわっている間、彼女は新社会人としてのスタートを切った。市内のブラジル人労働者の8割以上が働く東和工業で働きはじめたのだ。仕事の内容は、液晶製作工場での商品検査。時給は800円で、週に6日、一日12時間（うち3時間は残業）勤務するという雇用条件である。学生のときと違って、社会人としての自覚が出てきた。

（深夜1時過ぎ、アパートの隣人が経営するバーから帰ってきたあと、目覚し時計をセットしながら）

M：「明日は絶対遅刻したらいけん。これが学校じゃったら、今日みたいに遅く帰ってきたら、明日は絶対サボるの確実なんじゃけど、今は、働いとるけえ、休めん。」

Y：「何で休めないの？前の会社のときは休んでたじゃない？」

M：（しばらく考えて）「うーん、なんでかなあ。あ、前の職場のときはやる気がなかった。じゃけえ、休んでも気にならんかった。給料が安かったせいもあるけど、それだけじゃない。今は責任がある。今の仕事、結構好きやし。前のところは、おばさんばっかしやった。でも、学校、なつかしいよ。学校は甘えられた。」

（Mはマルシア、Yは筆者）

「みんなはまだ春休みで遊んどるけど、社会人になってみて、責任ってことがようわかった。まだ15なのに、もう、うちは社会人じゃけえ。」

製品検査の仕事は座り仕事の軽作業であるものの、目を酷使する仕事である。液晶の不備を探す検査のため、1日12時間、暗い部屋でひたすら目の前の液晶を凝視する製品検査の仕事は、視力が低下するばかりか、慣れるまでは吐き気、頭痛との戦いであるという。元々体が弱い彼女だが、薬局で頭痛薬と目薬を買い込み、何とか乗り切ろうとした。なぜなら、中学卒業直前、ちょうど彼女の父が労災事故で手を怪我して仕事に出られなくなったばかりか、運悪く同じ時期、母も腕を骨折してしまい、一家の中では彼女が唯一の働き手となってしまったからである。月給制ではなく、時

給制の場合、こうしたアクシデントは一家の家計を直撃する。日系二世であるマルシアの母は以下のように語る。

「うちの人が労災で仕事を休んでいるから、今はマルシアが働かないと、私たちは生活できない。労災が入ってくるのはまだ先だし。マルシアはブラジルに帰ってから、ブラジルで高校に入って、大学に行く。教育は大事。教育がないと、いい仕事につけない。」

(原語はポルトガル語)

非日系の父も以下のように語る。

「あと2年くらい日本に残る。マルシアはブラジルに帰ったら働きながら高校に行く。ブラジルはみな、働きながら高校に行く。」

(原語はポルトガル語)

高校に行きたかったのに、もうすぐ帰国からということで高校を断念したかと思えば、帰国予定はいつのまにか、2年延びている。そして、怪我をした自分たちの代わりに、家族一家の大黒柱として働くことを期待する一方で、帰国後はブラジルの学校での進学を切望する両親。しかし、両親の帰国計画はなかなか定まらず、どんどん延びていく。両親は日本にいる間は、日本で働いてもらい、ブラジルに帰ったらちゃんと学校に入れようとする。しかし両親のそうしたご都合主義的な態度に彼女は反発する。

「お父さんたちはブラジルに帰るって言っとるけど、うちは多分ブラジルに帰っても、また戻ってくる。日本に住みたいもん。一人で東和で働く。でも、ここ(A市)は知ってる人ばっかじゃけ、たぶん知ってる人が誰もおらんQ県の工場⁽⁷⁾で働く。そしてお給料で車を買う。車はシャコタンにしたり、ウーファーをつけたりして派手に改造する。ダサイ車はいや。」

4) 教育を終えて ― 退職そしてブラジルへの帰国 ―

入社後、社会人としての自覚が出て真面目に働くマルシアであったが、自律神経がおかしくなり、彼女はわずか半年で退職を余儀なくされた。そしてちょうどその頃、父の労災事故でまとまった金額が入った。親指を負傷した父に対して親指の機能障害に対して労災が認定され、補償金が支給されたのである。父は既に46歳であり、親指が動かしにくい状態で新たな仕事を続けるのは困難である。それに、彼女の両親は既に9年日本で働いており、ブラジルに家を購入していたほか、マルシアの父はブラジルの従兄弟と共同経営で事業を起していたため、帰国するには一番のタイミングで

あろうということで下した結論であった。

そして2001年6月、家族揃って帰国。ブラジルの学校は新学期が2月もしくは3月が新学期で、帰国時は既に新学期が始まっていたが、両親の「今高校に入っても学期途中だから、高校に入るのは来年からでいい」という考えにより、翌年3月までは家で過ごした。

日本から帰国した子どもたちの多くは、ブラジルの学校に早く慣れるように、特別に家庭教師をつけたり進学を目指して私立校を選択する傾向にある。しかし彼女の両親は新しい家を買うことと（すでに2軒家を持っていたが、うち1軒を売って、さらにもう1軒家を買う予定であった）、従兄弟と一緒に始めた事業を拡大することが先決で、娘の教育のために特別な投資を行なうことはなかった。また進学先についても、親戚が治安の悪さから公立校を避けるようにアドバイスしたにもかかわらず、「私立は授業料が高い」の一声で州立に進学することになった。

そして、今年3月からは家の近く州立高校夜間部⁽⁸⁾に入学。夜間部に入学したのは、「朝は苦手だし、昼間、好きなことができるほうがいいから」とのことである。そのような理由で夜間部を選んだ彼女に対して、両親も特に反対はなかった。

3年前の調査のときには「帰国後は大学に行くかも」と語っていたが、現在は、大学進学は考えてないという。そして両親の反対を押し切って、3年前から付き合っている3歳年上の日系人三世のボーイフレンド（A市在住時から付き合っており、彼女の帰国とともに、彼もブラジルに帰国している）と二人で日本へ再び働きにいく計画を立てているところである。

4. 考察：不平等な権力関係構造と日常的実践としての抵抗の戦術

マルシアが学校ではなく、学校の外に居場所を見つけた理由として、以下の三点が挙げられるであろう。

- 1) 「多様な価値を尊重する」という目標のもとに行われている外国籍児童生徒のための特別措置、すなわち、ブラジル人生徒達のために低い特別に低い学力到達目標を設定したり、多少の逸脱行動を許したりするような「特別待遇」は、同化圧力の高い学校においては「ダブルバインド」〔ベイトソン 2000〕であるばかりか、彼女を民族的他者として際立たせてしまう恐れがあり、さらには彼女の低い学力や、進学を不可能にする構造的な不平等を、民族的・文化的な「差異」として還元してしまう傾向にあるということ。
- 2) 日本とブラジル両国の経済に連動した両親の不安定な将来設計と家庭の経済事情により、彼女は自分の具体的な将来設計を持つことが難しくなっていること。
- 3) 彼女の両親は日本滞在中は貯蓄に目的を置いていたため、日本での娘の学校生活にはさほど関心がなかったということ。にもかかわらず両親は、帰国後の進路に対して期待を寄せてお

り、彼女はそのような親の期待が現実不可能なものであると悟っているということ。

マルシアの事例のみにおいて、ブラジル人ティーンエイジャーの「不登校」や「怠学」を一般化するのには慎まなければならないが、彼女をはじめとする在日ブラジル人ティーンエイジャーは、「一生懸命勉強して、よい学校に行き、よい仕事に就く」といういわゆる学歴社会の構造から、自分は排除されていると感じるようになる傾向にある。そして、そのような社会のシステムやそうした既成の価値観を押しつけようとする大人たちに対する反発として、さらにはそうした価値観を素直に受け入れ、学歴社会を肯定している同級生達との差異化の手段として、いわゆる「逸脱行動」をするのであり、最終的には学歴競争社会以外の生き方、すなわち、「働けば働いただけ、賃金という形で評価される非熟練労働」を選ぶのである。

異なる背景を持つ生徒の「差異」を「文化」として本質主義的に一般化する一方で、平等を標榜しつつ、実は隠れたカリキュラムやトラッキングによって、異なる文化的背景を持った子どもたちを学業のアーリーから排除する日本の学校教育は、社会的弱者、とくに外国籍の子どもたちに対してはダブルバインド的状况を強いる。同様に、「『日系人』という出自によって来日を合法化しながらも、国籍という見地からあくまで『外国人』としての対応に終始する」〔山ノ内 1998：262-263〕日本の入管法もまた、彼女を差異と平等のダブルバインド的状况に陥らせる要因となる。

このように、彼女は社会的不平等な構造に位置づけられている。しかし、彼女はそうした不平等な社会的構造を黙って受け入れるだけの無力な存在ではなく、能動的主体としてしたたかに道を切り開こうとしている。マルシアのみならず、「日本で生活するブラジル人ティーンエイジャーたちは、自身の置かれた周縁的なポジションと、他者によって一方的に決めつけられる学歴社会という既成の準拠枠の押しつけに反抗して、数々の『抵抗』を行っているのである」〔山ノ内 1999：102〕。差別や不平等の存在から目をそむけてはならないが、しかし、与えられた局面を精一杯生き抜こうとする主体に対して、研究者や教育者が「被差別者」としてレッテルを貼るとき、そこには新たな抑圧の構造が生み出される可能性は決して否めない。

マルシアの事例は、教育現場における「差異」と「平等」の問題を提起してくれる。違いを尊重しつつ平等であるという教育実践は、いかにして実現されるのであろうか。われわれは、彼女の日常実践から不平等な社会的再生産構造を読み取る一方、学校教育の現場や教育を語る言説において、「民族や文化など、ある特定のカテゴリーを共感可能な範囲の境界線と捉えることが、その内部の少数派や雑種的なものを排除し抑圧することになる」〔小田 2001〕ということにも注意を払わなければならないであろう。

注

- (1) 本稿は2002年6月に岡山大学で開催された、日本子ども社会学会第9回研究大会の口頭発表原稿（発表題目：「日系ブラジル人から見た日本の学校 ― マルシアの事例から ―」）をも

とに加筆修正したものである。また、調査の実施にあたっては、平成10～12年度文部省科学研究費助成金（特別研究員奨励費）および平成13～14年度文部科学省科学研究費助成金（特別研究員奨励費）の助成を受けた。

- (2) 本文中に登場する地名・人物など全ての固有名詞は全て架空のものである。
- (3) 外国籍児童生徒の教育実践においては、しばしば、日本語学級（あるいは日本語教室、国際教室など学校によって呼称は異なる）は『『非日本的要素』に満ちた空間であり、子どもたち遠慮なく、『自分自身』をさらけ出すことのできる場所』〔太田 2000：205〕であるとされており、しばしば「日本語の不自由な子どもたちにとっての一種のオアシスである」と表象される。しかし、日本語学級は一般の児童生徒にとって目に付きにくい隔離された場所にあり（B小学校の場合は、一般の教室棟ではなく、特別教室の棟の最上階に位置していた）、指導にあたる教師は、日本語指導のほか、理科や音楽、書道といった専科の授業も担当させられる、いわば「なんでも屋」であった。つまり日本語学級は、その役割においても、また空間的にも二重の意味で周縁的であるといえる。同様の指摘は太田〔太田 2000：203-204〕によってもなされている。
- (4) アパートで同居生活を送る彼らは、隣の市で若者相手のカジュアルなバーを経営しており、マルシアの両親とも家族ぐるみで付き合っていた。マルシアがきっかけとなって、彼らの経営するバーにはしばしばブラジル人が訪れるようになった。また、マルシアの両親が深夜の外出を認めるようになった理由の一つとして、両親が彼らを信頼しており、彼らの店だったら娘を安心して預けられると考えたからである。彼らはマルシアをまるで妹のようにかわいがっていた。
- (5) B中学校の日本語学級教師に対して行ったインタビューや、B中に在籍するブラジル人生徒の話を総合すると、B中の教師たちは、生徒たちが多少校則違反を犯していても、学校にきちんと来るのならば、不登校より「まし」であると考えているように見受けられた。B中学校では入れ替わりは激しいが、常時10人程度ブラジル人生徒が在籍していた。同校区には中学相当の学齢期にありながら中学校へ行かない子どもたちが多いが、日本の学校は、外国籍の子どもたちに対しては就学義務がないため、教師たちも学年途中で中退した子ども以外は、その数を把握できていないとのことである。
- (6) 日系二世の母と非日系の父を持つブラジル籍の女子生徒。卒業後、B地区で初めて全日制公立普通高校に進学したが、現在は高校を中退し、東和工業で働いている。以前、彼女の父にインタビューしたところ、「エレナは『高校を出たらアメリカの大学に留学して、将来は英語と日本語とポルトガル語の通訳になりたい』って言っているから、私たちは彼女の夢がかなうよう、一生懸命働かないといけない。」と語っていた。なお、マルシアの両親は、母が中学校中退で父が中学校卒業の学歴であり、来日前は、父は家電販売店の店員として、そして母は姉夫婦が経営する美容院で働いていた。一方エレナの両親は母が薬学部卒で来日前は公立病院の薬剤師として働いており、同じく父は工学部を出て、鉄鋼労働組合で専従として働きながら、

夜は高校で数学教師をしていた。

- (7) 東和工業はB市のほか、ブラジル人の多く居住する東海地方のQ市にも工場を持っており、B工場で働くブラジル人の中には、Q市から移ってきた者も多い。また、Q市はブラジル人が多く居住し、ブラジル人のためのエスニック・ビジネスも多く存在する。
- (8) ブラジルの学校は、午前部、午後部、夜間部の三部制で構成されている。夜間部の学生の多くは経済的理由により、昼間仕事をしている学生が中心であり、マルシアのように、昼間自由な時間を過ごしたいからという理由で夜間部を選ぶ学生は少ない。なお、ブラジルの高校（第二課程）進学率はおよそ3割であり、その半数は夜間部を選ぶといわれている。

引用・参考文献

- アップル、マイケル（浅沼茂・松下晴彦訳）、1992、『教育と権力』、日本エディタースクール出版部
- ウィリス、ポール（熊沢誠・山田潤訳）、1996、『ハマータウンの野郎ども』、筑摩書房
- 太田晴雄、2000『ニューカマーの子どもと日本の学校』、国際書院
- 小田 亮、「日常的抵抗」論の可能性 — 異種混濁性／脱領土化／クレオール性再考」、
（<http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/teikouron.htm>）
- 志水宏吉・清水睦美編著、2001『ニューカマーと教育 — 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』、明石書店
- セルター、ミシェル・ド（山田登世子訳）、1987、『日常実践のポイエティック』、国文館
- 広田康生、1997『エスニシティと都市』、有信堂
- ベイトソン、グレゴリー、2000、『精神の生態学（改訂第2版）』、新思索社
- 宮島 喬、1999『文化と不平等 — 社会学的アプローチ』、有斐閣
- 山ノ内裕子、1998「『日系ブラジル人』とは誰か — 在日日系ブラジル人をめぐる『戦略』と『戦術』—」、江淵一公編著『トランスカルチュラルリズムの研究』、明石書店、pp.253-267
- 山ノ内裕子、1999「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの「抵抗」 — 文化人類学と批判的教育学の視点から」『異文化間教育』13号、異文化間教育学会、pp.89-103
- Yamanouchi, Yuko., 2000, "A Etnografia dos Adolescentes Brasileiros no Japão", in Anais: XI Encontro de Professores Universitarios de Lingua, Literatura e Cultura Japonesa e I encontro de Estudos Japoneses, Universidade de Brasilia,, Brazil, pp.313-318

Inequality and Resistance in Japanese Schools: The Case of Brazilian Teenager, Marcia

Yuko Yamanouchi

The purpose of this paper is to examine the factors and background contributing to school truancy among Japanese-Brazilian teenagers in Japan, based on the results of long-term interviews with Japanese-Brazilian teenager Marcia, who lived in Japan from 1995 to 2001.

The following three reasons for truancy among Japanese-Brazilian teenagers were drawn from the results of interviews with Marcia:

- 1) Brazilian students were regarded as temporary sojourners and as such were not required to attain the same academic level as the rest of the class members. As a result such special treatment as a “guest” may have had the affect of excluding her from the group and labeling her as an ethnic and cultural “other” and may have contributed to her low academic standing in the Japanese educational system, where assimilation pressure is high. This labeling of differences may also be a contributing factor in eventually eliminate her from the Japanese educational system.
- 2) The instability of her parents’ financial situation, which was dependant on the fluctuating economies of both Japan and Brazil, contributed to her inability to develop a concrete plan for her life. This lack of direction was also a factor in her low academic achievement.
- 3) Marcia’s parents’ lack of interest in her school life during their stay in Japan was also a contributing factor to her truancy. Their devotion to making money so that they might one day return to Brazil did not leave room for attention to her academic achievements here in Japan. They didn’t expect any great academic achievement in a Japanese school but hoped that she would later succeed in school in Brazil. Marcia eventually realized the impossibility of attaining her parents' expectations.

Although these contributing factors are the result of only one interview, they can safely be broadened to include others in Marcia’s position. This leads us to the conclusion that, even though it is assumed that the Japanese school system affords equal opportunity education for all children, Japanese-Brazilian children have often been excluded as “other” and viewed with pity by teachers and classmates alike. In consequence, Japanese-Brazilian teen-agers’ truancy becomes an act of rebellion and a “tactic” of resistance used to strike out at the social and cultural structure of inequality within which they have been placed by their parents and the school system.